

5 階西病棟この1年を振り返って

5 階西病棟看護科長 菅原 玉枝

平成20年度は病棟方針として新たに①共感できる感性をもつ②感謝していただける看護をするを掲げ、以下の年間目標を立て看護活動をする事とした。

年間目標と評価

1 相手の立場に立った思いやりのある対応をする

患者さんの立場にたち全人的にアセスメントを行うためには共感できる気持ちや思いやりが大切である。そんなつもりで言っていないことが患者さんから誤解をまねくこともある。自分の傾向を分析し相手に快く自分の思いを伝えるためにはどうしていかなければならないか考える必要がある。例えば説明不足・説明の方法・不快を与える言葉の使い方・コミュニケーション不足などお互いに注意し合える職場の風土作りが重要である。

2 早期退院にむけて、統一した関わりができる

① 患者さんと共有した看護過程を展開できる
過去3年間看護研究で患者参加型看護計画を取り上げたがなかなか軌道に乗せられなかった。実際に患者さんとじっくり関わる時間的な余裕が持てないことが現実的には問題であった。患者さん家族が参加してもらうことの重要性はスタッフに浸透しているため、短時間で患者さんと共有できるような方法と体制作りが重要である。

② 退院時アセスメントを活用し、他の医療チームと連携をとり早期退院をはかれる不規則な勤務体制のため情報の共有が困難でありアセスメントシートの活用は重要であり、スタッフ間でも活用されるようになってきた。入院時の早期対応ですすみ方にも違いが出てくる。高齢化に伴い患者さんや介護する家族の年齢も高齢となり、退院調整もスムーズに行かないこともある。2011年には厚生労働省から療養型病床、施設の削減の方針で、自宅退院への関わりが更に重要になる。地域の在宅支援サービス・訪問看護ステーションなどと連

携をとり安心して自宅退院できるように、早めの対応を今後も継続していくことが大切である。

3 クリティカルパスを推進することができる

平成21年4月からDPC導入にあたり、見直し作成に努めた。軌道に乗せることができたのは整形が1つ、耳鼻科が3つとなった。今後も見直し作成していく。

4 自分の看護観を伝えることができる（ケーススタディー・3分間スピーチの実施）

固定チーム体制をとってから当病棟ではケーススタディーを毎月1名ずつ発表している。評価講評基準を作っていないため、レベルアップにつながっていないのが現状であり見直しをしていく必要があるが、自己の看護を振り返り、スタッフ間で看護を共有することができている。また3分間スピーチでは、個々の看護観が見えることでスタッフ間のコミュニケーション・信頼関係を育てる最良の機会になっている。今後も継続していく。

今後の課題

平成21年は4月からのDPC導入と11月の医療機能評価があり、それに向けての取り組みが重要になる。現在看護師不足のため日常の業務の多忙さから、身体的・精神的に健康を害するスタッフが増加している。

理想に向かい目標を次々とあげるのは大切であるが、求められることが多すぎると、モチベーションが保てず、退職につながるスタッフも出てくる現状である。患者さんに最良の看護サービスを提供するためにはスタッフに意欲を持ってもらえるように管理者として関わることの大切さを痛感した1年であった。

今年度の達成すべき目標を具体的に掲げ、達成感・やりがい感をスタッフが持てるような環境づくりをしていきたい。